

## 小笠原の環境改変の歴史

### History of the Natural Environment Influenced by Human Activities in the Ogasawara Islands

苜部治紀

Haruki KARUBE

小笠原の自然改変の歴史については、清水善和著「小笠原自然年代記」のなかでわかりやすくまとめられている。以下におもだった部分を抜粋し、小笠原諸島の環境改変の歴史理解の助けとしたい。

「小笠原という現在の名前は、小笠原貞頼という実在を疑われている人物が1953年に諸島をはじめて発見したという伝承に基づいている。確かな記録では小笠原に最初に人間が足を踏み入れたのは、1670年の漂着民といわれている。江戸幕府はこの情報をもとに1675年公式派遣隊を組織、調査を行なった。島々の地図を作るとともに領土を示す木柱を立て「無人島」と命名した。

この後19世紀に入り、日本近海でのマッコウクジラ捕鯨の盛り上がりとともにイギリスやロシアの艦船が小笠原に上陸するようになった。この中でロシアの探検船セニアピン号に同乗していた鳥類学者キトリツは手付かずの小笠原自然景観を今に伝える貴重な銅板画5枚を残している。

1830年には、ハワイからの移民約30名(5名の欧米人とカナカ人の従者)が移住し定着した。その後小笠原は多くの艦船の太平洋での中継基地となり、1840年代には年間40艘の捕鯨船が訪れたという。1853年には日本に開国をせまるためにやってきたペリーの艦隊も寄港している。領土的な危機感をもった幕府は1862年に日本人による移民開拓を実施したが、この時はわずか一年半で引き上げている。1876年に小笠原は日本領土として国際的に認められ、以後明治政府による本格的な開拓が始まる。

この日本人による開拓以前にも中継基地としての役割を担った小笠原には、艦船が寄港したときに調達できるように、ヤギ・ブタ・ウシ・シカなどを放している。こ

れらの草食獣の多くはその後野生化し、食い尽くしによる植生破壊のために島の自然に多大な影響を与えた。

また、固有鳥類のうちオガサワラマシコやオガサワラガビチョウなどは発見後まもなく絶滅しているが、これらは人間による捕食、随伴して持ちこまれたネコやネズミによる捕食などが絶滅要因として挙げられよう。

開拓が本格化すると森林破壊は急速に進行し、とくに固有種のオガサワラグワは金銭価値も高く、徹底的に伐採された。1938年時点で「現在は僅かに母島桑の木山、石門山保護林等に存在するのみ」というまでに減少していた。現在では弟島に数十本が残るほかは父・母にわずかな個体が残されているのみである。鴛島列島北ノ島のアホドリもこの時期に乱獲によって絶滅している。

戦前には移植人口は増加の一途をたどる。1875年に71名だったものが、1911年には4521名、1925年には5818名、戦争末期の1944年には7711名を超えるほどになっていた。サトウキビがおもな産業となっていたが、急峻な土地も含めて島の大部分が開墾されて利用された。その後は砂糖の暴落もあって多くの畑は放棄された(\*当時は島という島に開拓を試みたようで、属島のごく小さな島々(例え母島列島の姪島など)にも当時の人跡を見ることができる)。サトウキビ栽培は1922年の世界的な暴落のあと衰退し、変わって農業の中心は冬物野菜と観葉植物栽培に移っていった。

戦争末期の1945年には父・母両島あわせて二万人を超える軍隊が駐留し、食料不足のために固有植物のノヤシの芽までが食用とされた。このため本種は一時は絶滅が心配される状況になった。ただし、同時に放逐されていたヤギなどの多くの草食動物が狩られたことも容易に想像でき、このことは島の自然回復には役立つものと考えられる。

なお、1944年には島民6882名が強制引き上げさせられた。終戦後はしばらくアメリカの統治が続き、この時期には父島以外の島は無人島と化した。この間島の自然はかなり回復し、畑の跡もヒメツバキなどの二次林に覆

われた。

しかし一方で戦前に荒廢地の緑化目的や薪炭材として導入されたアカギやギンネムが繁茂し、とくに前者は現在では原生林にも深く浸透してかなり深刻な状態になっている。

日本に返還された1968年以降近代的な開発が本格化する。島の外周道路などは二車線幅の全面舗装がのびた。この際には多くの自然植生が破壊され、いくつかの種では絶滅が危惧される状況に陥ってしまった。」(以上清水善和、1998「小笠原自然年代記」5章・6章より抜粋。)

つまり小笠原と人間との関わりはたかだか300年程度しかないわけであるが、開拓期は現在と異なり自然保護の思想自体が存在しない時代であり、当初の大規模な開拓や食料としての捕獲などによって原生自然はほとんど破壊されてしまったわけである。

戦前からはさすがに現状に危機感を抱いた人間もあり、また動植物相の調査も進行して、小笠原が非常に多くの固有種を抱える特殊かつ貴重な地域であることが認識され始めた。米軍統治時代を経て日本に返還されてからは国立公園特別保護地域の指定や天然記念物の指定な

ど法的な整備も進んだが、具体的な保全策は乏しく、天然記念物についても放置されてきたのが実情である。また、道路工事に代表される公共事業は現在も継続され、母島南部では貴重な自然林の伐採が続いている。返還後は徐々に人口も増え、父島の北袋沢、長谷、母島の乳房山麓、玉川などにダムが次々と設置され、良好な環境の沢の多くが破壊された。

1990年代に入り世界的な環境への関心が高まるなか、具体的な施策が実施されるようになるとともに、地元NPOによる保全活動も活発になってきた。

返還後からの自然破壊の大きな要因は公共工事とともに移入生物による影響が非常に大きい。これは海洋島であるとともにひとつひとつの島の面積が小さな小笠原ならではの面もあるが、状況は悲惨なもので、非常に多くの動植物が意図的・非意図的に移入されている。脆弱な島の生態系には過大な負荷になっており、多くの固有生物が影響を受けている。詳しくは次項以降で触れる。

#### 参考文献

清水善和, 1998. 小笠原自然年代記. 158pp. 岩波書店.